



地域の資本を活かして、日本をもっと元気に、北海道をもっと明るくすることを目的としています。全国各地の地域づくりの成功例を調査し、農村と都市の共に繁栄するあり方を研究しています。さらに農村と都市の共生と交流の促進を提言し、各地の地域振興の具体的な組織と連携し、各種事業を実践します。

農都共生研究会 Agricultural laboratory

■活動内容
研究会は次の活動を行う。

- ① 多様な活動主体の取組活発化に向けた活動
- ② 地域住民への普及・啓発に向けた活動
- ③ 農村と都市の共生と交流推進方策の検討
- ④ 農都共生に関わるビジネスプランの検討
- ⑤ その他研究会の目的を達成するために必要な活動

2014年度 活動報告

4月11日 山梨視察報告会とワークショップ

企業のCSR活動、社会貢献の一環として「都市も農山村もお互いに元気になる社会」の取り組みを、農都共生研究会会長の山梨の視察報告を基に農都共生研究会会員7名にてワークショップ。北海道における今後の可能性を検討。

7月27日 農都共生研究会特別対談

8月 慶應義塾大学大学院SDM研究科 26～29日 アグリゼミ十勝視察

10月13日 由仁町「まるほり野菜園」プチ援農

農都共生研究会のワークショップにより、新規就農を決断したまるほり野菜園の堀内さん。由仁町三田村さんの指導を受け、多品種の野菜を栽培。ビニールハウス内のオレンジキャロルなど7種類のミニトマトを選別、集荷の作業をお手伝い。



11月6日～ 6次産業人材育成講座

昨年に引き続き札幌市の「6次産業人材育成講座」運営業務を農都共生研究会が受託。2013年11月6日～21日まで14講座、2回の視察研修を実施。6次産業化への取り組みに資する人材育成の講座を農都共生研究会メンバーが中心となって開催。

2014年 3月4日 農都共生研究会フォーラム 「農業・農村で幸せになろうよー農都共生に向けてー」

農都共生研究会林美香子会長から都市住民のライフスタイルが変化し、「物質的豊かさ」より「心の豊かさ」を重視する人や、レジャー・余暇に生活の焦点を置く人が増え、農業・農村への関心が高まっている今こそ、農都共生を推進する絶好のチャンスであるとの基調講演が70名の参加者により札幌市内にて開催。



3月 報告書発行

Pick up 農都共生研究会特別対談

「農都共生と地域活性」

「農都共生と地域活性」をテーマに法政大学大学院政策創造研究科教授：SDM研究科特別招聘教授 中嶋間多氏と農都共生研究会林美香子会長による特別対談を開催。

始めに、中嶋氏から「地域ブランドとは、地域に対する消費者からの評価であり、地域が有する無形資産のひとつである。また、地域ブランドには、商品としてのProduct Brandと、観光・居住・投資を目的とするRegional Brandがあり、この二つの要素を同時に高め、シナジー効果を生み地域活性化を実現する活動のことを地域ブランド戦略と呼ぶ」と地域ブランド戦略の提言の後、小布施若者会議、信州倶楽部などの地域における具体的な取り組み、また2013年7月にオープンした『「ちゃばら」日本百貨店しょくひんかん』（秋葉原・東京）の開店までの経緯、農村と都市をネットで結ぶ永田町「さとゆめラボショップ」等々、起業までの経緯を含めわかりやすく解説。

林会長からは「美瑛選果」など魅力的な北海道内の農産物直売所の紹介と、北海道内から全国、海外までの人気のファームイン、ファームレストランのメニューからディスプレイおよびプロモーションの取り組みなど多数の事例を紹介。農村の多面的機能を利用した農村のコミュニティビジネスの創意工夫の必要性を説明。

今回の特別対談のテーマとしての農都共生と地域活性化とは、まさしく地域の宝に気づき、地域の宝をいかすことであることを実感した対談となった。



活動内容や掲載記事など、詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.noutokyousei.jp/> 農都共生研究会 検索



■お問い合わせ
慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科
[日吉学生部SDM担当]
〒223-8526 横浜市港北区日吉4-1-1 協生館2階
TEL 045-564-2518 FAX 045-562-3502
E-mail sdm@info.keio.ac.jp

■2014年3月発行
発行/慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
農都共生研究会
企画・制作/東海林商事株式会社【農都共生研究会事務局】
〒060-0051 札幌市中央区南1条東1丁目2-1 太平洋興発ビル
TEL・FAX 011-252-7411 E-mail shoji@s-co.jp

AGRILAB REPORT



農都共生ラボ活動報告書

2013 - 2014

農林中央金庫寄付講座

「フードバレーとかち」 視察2

慶應SDMの「アグリゼミ」

農都共生ラボ・アグリゼミ学生レポート
「Next leader from AGRI semi」

農都共生研究会

十勝千年の森にて





農村と都市の共生を システムとして捉える慶應SDM

林——アグリゼミは各々の研究室のゼミに所属する学生が、横断的に参加するゼミです。前野先生には早くからアグリゼミに協力していただいています。まずSDMとアグリゼミについて、簡単にご説明いただけますか。

前野——SDMはあらゆる企業・技術・人間をシステムと見て、そのシステムの関係性から生じるあらゆる問題を解決していくという大学院です。学問のベースはシステムズエンジニアリングとデザイン思考という理系学問からなりますが、対象は社会システム、農業、食糧問題、国際問題など様々です。なかでも食糧や農業、まちづくり、都市と農村の関係などは、今後必ず求められる課題としてSDM発足当初から取りこんでいこうと考えていました。そこで林先生に来ていただき、アグリゼミを創設しました。

アグリゼミのテーマは、農学部での研究や社会的なコミュニティ研究と違って、システムとして全体で解かなければならないものです。各先生の得意分野を横に束ねることで解決できるものであり、それを実現するアグリゼミは最もSDMらしいゼミのひとつとなりました。



ゼミ風景

林——アグリゼミは農林中央金庫の寄付講座ですが、都会的なイメージを持たれる慶應で、また農学部もないのに開設されていてすごいという反応が多く寄せられます。さらに、学生それぞれの関心によって研究テーマを設定するのも、ほかの大学院にはない特徴といえます。バイオマスや消費者参加型農業、植物関係など、農業農村の括りには入るものの、内容は実に様々です。

前野——入ってくる学生は専門性に加え、強い問題意識を持っていますから、研究テーマは担当教授が決めるものではありません。しかも、それを現実の問題解決に結びつけています。単なる研究のための研究ではなく実社会を見据えての研究、これがアグリゼミやSDMの特徴です。

林——ほかにアグリゼミには、入る以前から農業との関係が深かった人、まったく関係のなかった人がいます。前野先生は実際に農業に関わってみて、その魅力はどこにあると思われませんか。

前野——私の母は陶芸をしていますが実家は農家です。この2つは関係ないようには見えませんが土に触れる点で共通しており、以前からその点が幸せにつながるのではないかと思います。その後、幸せのメカニズムを研究するようになり、幸せの条件というのがわかってきました。①自分の目的を成し遂げること、②つながりをもってみんなでやること、③楽観的になること、④人の目を気にしないこと、の4つです。私も関わった日吉自然栽培農園の開墾は、まさに幸せの4条件を満たしています。荒れた土地を皆と一緒に少しずつ畑にしていく。規模は違っても北海道の原野を開拓した気持ちになって、大変な幸福感が得られましたね。

林——収穫の幸せもあると思います。

前野——私も教育者ですから、自分の育てた人材が実るのは大変な幸せです。作物にも同じように実りの幸せがある。農業には、現代人が忘れかけていた本当の幸せを見つけさせてくれる力があるのではないのでしょうか。

※2014年4月から、長野県小布施町で「慶應義塾大学大学院SDM研究科付属SDM研究所ソーシャルデザインセンター・農都共生ラボ・地域活性ラボ 小布施分室」開始予定

■農都共生ラボ担当教員



前野 隆司 Takashi MAENO

慶應義塾大学大学院SDM研究科
委員長・教授

キャンノン(株)、カリフォルニア大学バークレー校Visiting Industrial Fellow、ハーバード大学客員教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て現職。

■研究テーマ/システムデザイン理論・方法論、人間社会システムデザイン、技術システムデザインなど

■著書/『思考脳力のつくり方』『脳はなぜ「心」を作ったのか』『錯覚する脳』『幸せのメカニズム-実践・幸福学入門-』ほか



林 美香子 Mikako HAYASHI

慶應義塾大学大学院SDM研究科
特任教授/農都共生研究会会長

北海道大学農学部卒業。札幌テレビ放送株式会社アナウンサーを経て、キャスターとして独立。北海道大学大学院にて、博士(工学)を取得。慶應義塾大学大学院SDM研究科特任教授。北海道大学大学院農学研究院客員教授。札幌在住。

■研究テーマ/持続可能な農業、農村と都市の共生による地域再生、食と農による地域づくりなど

■著書/『農都共生のヒント』『農村へ出かけて』『農業・農村で幸せになるうよー農都共生に向けて-』ほか

十勝視察 2

3泊4日



TOKACHI



紫竹ガーデンにて

SCHEDULE

8月26日 鎌田きのこ

ビストロコムニ

柳月

ますや「麦音」

8月27日 八千代牧場

いただきますカンパニー

紫竹ガーデン

カウベルハウス

8月28日 十勝千年の森

愛菜屋

北の屋台

8月29日 帯広市役所
(ワークショップ)

十勝に揃った好条件。

「とちまっシュ」

——鎌田きのこ

今年度は、8月26日～29日までの4日間、慶應SDM委員長前野隆司教授、林美香子特任教授、学生5名と研究員2名で昨年引き続き十勝を訪問しました。

「十勝の魅力を発掘する」をテーマに、まずはじめに訪れたのは、帯広市で独自に「とちまっシュ」を栽培し、販売している鎌田きのこです。親会社は、香川県の醤油の老舗「鎌田商事」。もともとは、醤油のダシ原料のために旨味成分を多く含むマッシュルームを作り出したのが始まりでした。高品質のマッシュルームをつくる3つの条件、馬堆肥、麦の敷き藁、綺麗な水。十勝にはこれらが、ばんえい競馬、生産量日本一の小麦、清流札内川という形で見事に揃っていたのです。

さっそく登場「とちまっシュ」の

特製ソース

——ビストロコムニ

続いて、帯広競馬場内「とちまっら」へ移動。十勝食材のフレンチを気軽に楽しめる「ビストロコムニ」でランチをしました。香ばしく焼き上げたチキンにたっぷりかけられたコクのあるソースは、先ほどお話を聞いた「とちまっシュ」でつくられたものです。

家族の団らんを生む企業の、

高い意識を学ぶ。

——柳月

柳月スイートピアガーデンではまず、北海道を代表する銘菓として全国的にも人気の高い「三方六」の製造ラインを見学。その後田村社長から直接お話を伺い、「お菓子を通じた家族の団らんの提供」という理念を叶える家計に優しい販売価格と、それを支える従業員一人一人の徹底したコ

スト意識を学びました。そのほか、三方六の美味しさの誕生秘密や今後の海外戦略の展望、十勝の農業と雇用を守っていく使命感など、幅広く貴重なお話をお聞きすることができました。

ビジョンを形にする様々な取り組み。

——ますや「麦音」

昨年に続き今年も訪問した、ますや「麦音」は、小麦畑を目の前につくりたてのパンを食べられるベーカリーテーマパークです。「地元の人に十勝産小麦の価値をもっと知ってもらいたい」杉山社長の想いと具体的な取り組みをお聞きました。音更町の農業青年たちと連携した「麦感祭」や、全国からパン職人が集るベーカリーキャンプ、年間100回以上開催するパン教室・ピザ教室などを通して、十勝産小麦への関心の気運は着実に高まっているようです。麦音ではさらに、音更町で小麦やなたねを生産している農家の佐藤さんから、地域に適した6次産業化の可能性をお聞きました。

悪戦苦闘しつつ、腸詰め加工を体験。

——八千代牧場

2日目は、ソーセージづくりからスタート。十勝の様々な加工品の中でも根強い人気を誇る八千代牧場のハム・ソーセージ。その手づくり体験に挑戦しました。肉を

念入りにこね、ハンドスタッファーと呼ばれる道具で羊の腸に肉を詰め込んでいきます。初めての作業に、皮が破れたり、重なったり、途中で空気が入ってしまったり、みんな悪戦苦闘です。ここでは、食育の取り組みとして、帯広市内の小学校などを対象に体験教室を開催しています。この日の学生たちも、まるで子どもに戻ったような楽しげな表情でした。

自ら収穫して、揚げたて、いただきます！

——いただきますカンパニー

この日の昼食会場は、なんと畑。十勝で、実際の農家さんの畑の中をガイドするという、全く新しい取り組み「畑ツアー」を主催している「いただきますカンパニー」の井口美美子さんのご案内で、幕別町小出農場にお邪魔しました。ふかふかの土の感触や初めて目にする長イモのツルに驚きながら、自分の手で掘り起こしたメークインを揚げたてでいただきました。「農業の魅力を伝え、子ども達に農業のある社会を残してあげたい」と語る井口さんの想いを、十勝の畑の真ん中で、全身で感じる貴重な機会となりました。

十勝の「人」の魅力も。

——紫竹ガーデン

北海道ガーデン街道のルートのひとつ

でもある「紫竹ガーデン」は、代表の紫竹昭葉さんが25年前63歳の時に開いた庭園で、22のゾーンに約2,500種の花が咲いています。小雨の降る中、87歳とは思えないほど元気でチャームな紫竹さんに案内されて、18,000坪の広大なお花畑を隅々まで歩き回りました。力強く咲く花たちはもちろんのこと、花の名前や特徴、植えた当初のエピソードなど愛情いっぱい話すおばあちゃんの姿に、学生たちは視察のヒントを得たようです。

十勝だけにとどまらない、

地域連携の大切さ。

——十勝千年の森

今年年間50万人以上を集客し、北海道を代表する大きな観光ムーブメントとなっている「北海道ガーデン街道」ですが、この日お話を伺った十勝千年の森の林克彦社長こそ、その仕掛人だったのです。一企業としてでなく、広いエリアで連携して地域の魅力の提案能力を高めていく。新聞社のカーボンオフセット構想の一つだった清水町の森が、北海道観光の目玉として注目を集め、イギリスの国際ガーデンアワードで「世界一の庭」と認定されるまでの戦略に、地域観光の可能性を学びました。さらに今後、釧路や阿寒、知床にまで連携を広げていく新たなビジョンまでお聞きすることができました。

規模も種類も、スケールの大きさに驚き。

——愛菜屋

清水町から帯広市へ戻る途中、芽室町にある野菜の直売所「愛菜屋」に立ち寄りしました。店内には、生産者から朝一番で届く採れたての野菜がズラリ。壁には、一面に生産者の方の笑顔の写真が貼られています。お店の広さから、種類の豊富さ、安心のトレーサビリティまで、そのスケールの大きさに学生たちは驚いていました。

食をテーマにした交流の場

——北の屋台

最後の訪問場所は「北の屋台」。暖簾をくぐりたくなる気持ちを抑えて、まずは北の起業広場協同組合の久保さんにお話を伺いました。

12年前、中心街で何かおもしろいことを！と目指した「商店と人とのコミュニケーション」という手がかりが、北の屋台を作り出します。どの店も、隣の人と肩が触れるほどの狭い空間。そこに生まれる小さなコミュニケーションが、人をつなぎ地域を盛り上げます。久保さんとおきの「女性におすすめの飲み方」もその例のひとつ。このお話の後、最後の夜を北の屋台で過ごした学生たちは、飲んで食べてそれを実感したようです。

「いいね！」で、雰囲気も発想もやわらかく

——ワークショップ

最終日は、視察の成果報告として「十勝の魅力を開発する～また来たい十勝に向けて～」をテーマに、ワークショップと発表会を行いました。これには、学生たちだけでなく視察にご協力いただいた市役所の方や訪問先の方、さらには地元旅行業者の方や観光コンベンションの方など、多くの方にご参加いただきました。

学生たちから4日間の簡単な報告のあと、全体を4つのグループに分けブレインストーミングを実施。各グループとも学生が主導しますが、立場や年齢に関係なくお互いをニックネームで呼び合うことで話し合いは和やかな雰囲気で進みます。出た意見に対して必ず「いいね～！」とコメントして、生まれたアイデアはさらに発展していきました。

ブレインストーミングは、「十勝人自慢」「また行きたい旅行」について意見を出し合い、「十勝で人々が交流する方法」として発表へむけてまとめてゆくという流れです。

学生たちからの体験を通じた実感と、地元行政と民間の考えとが、互いに自由に発展し合い、アイデアはそれぞれ個性あふれる方向へと育っていきました。

「また来たい十勝」への提言。

——発表

午後はいよいよスキット(寸劇)による提言発表です。最初のチームは、十勝に遊びに来た女性が麦感祭や花火大会といったイベントに参加して、そこで出会った農業青年と結婚、10年後には夫婦で北の屋台に店をかまえているというストーリーでした。第2チームは、フラれて傷心旅行に来た青年が、北の屋台で店主と地元旅行会社との巧みな連携プレーで、十勝の女性と知り合い交流が続くというものでした。第3チームは、人生に失望して東京から十勝にきた青年は、ひょんなことから農家の仕事を手伝うことに。美味しい野菜や肉で元気を養い十勝美人にプロポーズするというストーリーです。最後のチームは、美味しいものを食べた男と厄年でツイてない女が「十勝幸福食い倒れツアー」に参加、ガーデンや農業体験、バーベキューを楽しむ結婚するというもの。どのグループも「体験」や「人との縁」、「幸福」といった4日間で得た成果が盛り込まれる内容となりました。

地元企業の方からも「今後の参考にしたい」と感想をいただき、帯広市の本迫副市長からは「外の人からの声を生かし、十勝の価値と一緒に磨きを掛けていきたい」とご講評をいただきました。



十勝千年の森



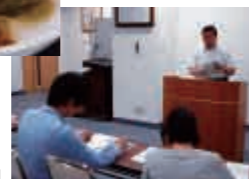
いただきますカンパニーの畑ツアー



とちまマッシュソースで「ピストロコムニ」ランチ



柳月



鎌田さのこ



ますや「麦音」



八千代牧場でソーセージづくりを体験



ワークショップの後、スキット(寸劇)で表現された視察報告会



帯広市役所の方々も報告会に



北の屋台で視察の成果を語り合った



愛菜屋の壁には生産者の顔が並び



▲農家の友 2013年10月号



▲北海道新聞夕刊 2013年8月28日付



▲十勝毎日新聞 2013年8月30日付

視察先の皆様には大変お世話になりました。誠にありがとうございました。

修士課程2年



星野 雄介

食べることは生きる為に必要な活動ですが、近年では、食に込められた生産者のメッセージも消費者にとって重要な要素になってきています。この様なメッセージを、様々な視座から研究できるのがアグリゼミです。

■修士論文研究
働きながら学ぶためのきっかけ提供システムのデザイン～公開講座のレコメンドによる学習コミュニティへの誘導～

修士課程2年



島田 亜依

アグリゼミは、農業に少しでも興味があれば参加できます。活動は学生が主体となって進めますが、先生方も強力でバックアップしてくださるので、意欲があればいろいろなことにトライできるゼミだと思います。

■修士論文研究
クラシックコンサートの鑑賞者育成方法の研究～学習塾・ピアノ教室・鑑賞教室を組み合わせた音楽教室の提案～

修士課程2年



杉山 のぞみ

アグリゼミの二年間で、一番思い出深いのは、やはり十勝視察です。熱い思いを持った農家さんに出会い、農家や農業に対するイメージが変わりました。多様な人と出会える機会が多くあるアグリゼミに入り本当に良かったと思います。

■修士論文研究
欲求連鎖分析を利用したコーズリレーティドマーケティングのコンセプト設計手法

修士課程2年



茂山 愛保

今年は交換留学があり、アグリゼミの一大イベントである夏の視察には参加出来ませんでした。留学先ではアグリゼミで培った視点で、ヨーロッパの各地を観察し、帰国して共有出来ました。先生とゼミの仲間に感謝しています。

■修士論文研究
音楽聴取と感情の変化に関する音声分析を用いた研究

修士課程2年



中本 亜紀

アグリゼミで、農都共生の推進に向けた議論・活動を学内外の幅広い方々と共に行い、多くの学びを得ることができたことは、SDMで得た財産の1つです。卒業後も、自分の活動の中で活かしていければと思います。

■修士論文研究
防災を考慮した住宅のリスクマネジメント

博士課程



今野 浩子

アグリゼミでは、地域のハイレベルな活動「観る農業」、世代を超えて実施する「する農業」、地域をあげて農業イベントなどを誘致・支援する「支える農業」など、素晴らしい活動を学べる場です。

■博士論文研究
スポーツコーチングの価値協創モデルの構築と有効性検証～スキー指導過程のシステムズ・アプローチによる構造化を事例として～

修士課程1年



山本 絵里子

人工衛星プロジェクトの一環で、農業での衛星による付加価値を検討したことをきっかけに参加しました。農業や地域活性化を実際に仕事とするメンバーもあり、リアルな体験に基づいて議論ができる貴重な場となっています。

修士課程1年



森 浩気

十勝視察では、特色ある事業に取り組む農家や地域ビジネスの現場を体感でき、報告会のワークショップ設計を通じ、貴重な学びや経験を得ました。多様な機会に恵まれるSDMの良さが、アグリゼミには凝縮されています。

修士課程1年



清 奈帆美

アグリゼミのテーマは「農都共生」ですが、ディスカッションを行うと、「農業」と「都市」ではなく「農業」と「自分」という視点が大切のように感じられます。農業により生産されたものが欠かせない生活を一緒に考えてみませんか？

修士課程1年



ワシエワ イリナ

戦後日本の農業と食の構造変化や問題に興味がありアグリゼミに参加。十勝視察は都会在住者の視点から農業の現状を分析。ワークショップでは十勝の農業と環境共生をシステムとして解くSDM手法の多様性を感じました。

修士課程1年



名倉 あさ美

十勝視察は、壮大な自然と温かい人々に触れ、充実した視察に。特にガーデンに魅了されました。千年の森の緻密に構想された美しさと、紫竹ガーデンの自由に咲く花の美しさ。正反対ですが、いずれも北海道の美しさを感じました。

修士課程1年



平島 優人

大学院では、システムとデザインを学んでいます。農業だけではなく、地域活性や教育など多様な領域を横断的に、かつ俯瞰的な視点から総合的にデザインをしたいと考えています。

2013年度 農都共生ラボ活動成果

【論文】

■前野マドカ、加藤せい子、保井俊之、前野隆司
「主観的幸福の4因子モデルに基づく人と地域の活性化分析—NPO法人「吉備野工房ちみち」のみちくさ小道を事例に」、地域活性研究、Vol.5、2014年3月

【寄稿】

- 林美香子
◎「月刊JA」(JA全中)2013年6月号 「農都共生のために食農教育を」
- ◎「AFCフォーラム」(日本政策金融公庫)2013年6月号 「農都共生のすすめ」
- ◎「ニューカントリー」(北海道協同組合通信社)2013年7月号 「農村コミュニティビジネスのすすめ」
- ◎「FOR YOU 第30号」(北海道信用金庫協会)2013年7月 「食育から一歩進めて食農教育を」
- ◎「明日の食品産業」(一般財団法人食品産業センター発行)2013年11月号 「ヨーロッパ食事情～農都共生の視点から」

【メディア掲載】

- 農都共生ラボ(アグリゼミ)
◎日本農業新聞 2013年8月6日 農都共生研究会の特別対談「農都共生と地域活性」の報告記事
- ◎十勝毎日新聞 2013年8月27日 「新たな魅力発掘へ 農と観光現場視察」記事
- ◎北海道新聞 2013年8月28日 「慶大大学院生ら十勝農業学ぶ 地産地消に商機」記事
- ◎十勝毎日新聞 2013年8月30日 「慶應大学院アグリゼミ生 十勝を視察し発表会」記事
- ◎「農家の友」(北海道農業改良普及協会発行) 「十勝の魅力を発掘する～慶應義塾大学SDM アグリゼミ十勝視察」記事
- 林美香子
◎「開発こうほう」2013年4月号 コーディネーターを担当した、札幌市経済界フォーラムの報告記事
- ◎「地域づくりシンポジウム2013」(公益財団法人はまなす財団)2013年8月
コーディネーターを担当した「これからの北海道の地域づくり」報告書
- ◎「ウォーターフロント研究レポートvol.52」(一般社団法人ウォーターフロント協会)2013年10月 「港とまちづくり」講演録
- ◎北海道建設新聞 2013年11月1日 「農都共生に可能性を感じて」のインタビュー記事
- ◎日本経済新聞 2013年12月6日 コーディネーターを担当した「北海道・農と食・未来フォーラム」の報告記事
- ◎「ニッキン」(金融関係の専門新聞)2014年1月10日 「農都共生で地域再生」のインタビュー記事

【新刊】

農業・農村で幸せになろうよ

—農都共生に向けて— 林美香子 編著

—本書は「物の豊かさ」と「心の豊かさ」、そして「農都共生」がゆるやかに繋がっています。これはどのような経緯で生まれたのでしょうか。

林 慶應SDM「農都共生ラボ(アグリゼミ)」の活動成果として刊行いたしました。農都共生ラボのこれまでの調査研究・視察などで出会った農業者や専門家、実践者の方達と私の対談集と、農都共生に関するコラムで構成されています。

農村と都市の共生をテーマにする中で、都市住民のライフスタイルが変化し、「物質的な豊かさ」より「心の豊かさ」を重視する人、あるいはレジャーや余暇に生活の力点を置く人が増え、農業・農村への関心も高まりつつあります。今こそ、農都共生を推進するチャンスであり、都市側には、

楽しみや心の豊かさなどの恩恵が、農村側には生きがいや副収入をもたらすなど、双方への効果があります。農都共生活動による「情報の循環」「人材の循環」「経済の循環」が、農村・都市の双方に活力をもたらす、地域の持続可能性、そして幸せな社会に繋がっていき、幸せのヒントをつかんでいただけることを願って出版いたしました。

—8つのケースでは様々な人物が登場しますが、実際に農業分野で起業をしたSDMの修了生の話もありますね。

林 SDM研究科農都共生ラボ(アグリゼミ)は各々の研究室のゼミに所属する学生が、横断的に参加するゼミです。このゼミから実際に農業分野で起業をする学生が出たことは非常に嬉しいことです。しかもCSA地域支援型農業であるとか、植物工場や農業による雇用まで起業のあり方も多様です。本書でも前野教授が「理系的・システムの発想をもっている。まさにこれがSDMやアグリゼミの多様性です。(中略)アグリゼミでは他にも、農業と

町づくり、農業とテクノロジー、食育と文化文明などを研究している人、農業以外でも安全保障とか政治経済などの研究者がたくさんいます。このような大規模なシステムをつくり変えていくという学生達の希望が実現すれば、これほどうれしいことはない。」と述べられています。本当にその通りだと思います。

—幸せという視点で、農業・農村を語るの非常にユニークだと思うのですが。

林 広々とした空間、新鮮な空気、美しい農村景観、おいしい食べ物、素朴で温かな人々との交流で都会では味わえない、癒しの力や、暮らしの豊かさを感じます。そして、本当に幸せな気持ちになります。慶應義塾大学で幸せをテーマに研究する先生達と交流するうちに、農業・農村の持つ魅力をひとりで表現すると「幸せ」という言葉になるのではないかなと思うようになりました。本書により、日本中に、農業・農村で幸せになろうという共感の輪が広がっていくことを願っています。



「農業・農村で幸せになろうよ」 —農都共生に向けて—

林美香子 編著

体裁/四六版 価格/1500円+税
出版社/株式会社安曇出版(東京)
http://www.azmp.co.jp/
協力/慶應義塾大学院SDM研究科農都共生ラボ
農都共生研究会

●発行/2014年3月